

# 家庭科

## 1 育成したい「思考力」

- a 生活事象を様々な観点から多面的に見直し，総合的に捉える力
- b よりよい生活づくりに向け，見出した観点から解決法を選択したり工夫したりする力

現行の学習指導要領では，家庭科の学習において育成すべき「思考力」は，「生活を創意工夫する能力」であり，「家庭生活について見直し，身近な生活の課題を見つけ，その解決をめざして考え，自分なりに工夫する能力」であるとしている。

本校家庭科では，「生活を多面的に見直し，総合的に捉える力」「自分の生活をよりよくするために選択・工夫する力」を育成することで，様々な生活事象を見直し，他者と共生しながらより楽しく豊かな生活を創っていくことができると考えた。

- a 生活事象を様々な観点から多面的に見直し，総合的に捉える力

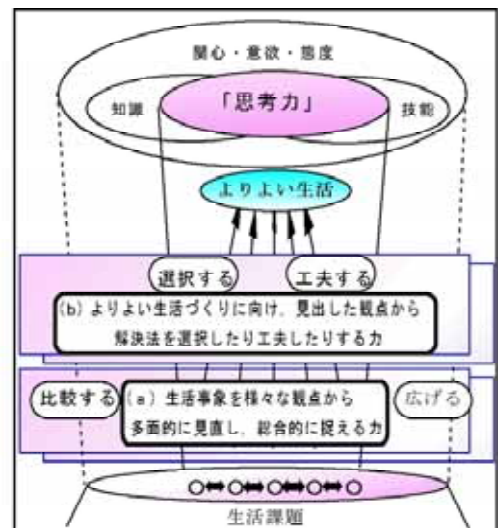
まず，一つの生活事象に対して複数の課題を見出し，それらを自分や家族の家庭生活から多面的に見直す力のことである。例えば，朝食について「毎日メニューが決まっている」や「野菜が少ない」などの課題を見出し，それに加え，栄養バランス・色どり・量・時間・経費などの観点からも多面的に見直し，捉えることができる力である。

よりよい家庭生活のあり方を導き出すためには，課題に対して生活経験や既習の学びを基に見通しをもち，他者とかかわり合いながら解決方法を広げることが必要である。そのためには，こうして得られた多様な観点それぞれについて，それらがもつ長所・短所の両面から比較しながら分析していくことにより，総合的に捉えていくのである。

- b よりよい生活づくりに向け，見出した観点から解決法を選択したり工夫したりする力

aで見出した生活事象を捉える多様な観点で，自分の家庭の状況に照らして，最も適していると思われる解決法を選択したり，よりよいものに工夫したりしていく力のことである。

例えば，よりよい朝食を考えていく場合，一般的には，ごはんのみそ汁を基本とした朝食はバランスがよいと捉えることができる。しかし，「朝は忙しいので，我が家では手早く作れるパンと卵のおかずしよう」と選択したり，「前日の夕飯の時にゆでたほうれん草を少し取っておいて，翌日の朝食のおかずを手早く作ろう」と工夫したり，家族の一員として生活をよりよくしようという観点から考えて，解決方法を決定していく力のことである。



【2つの「思考力」】

## 2 脳神経科学研究の4視点からのアプローチ

### (1) 「意欲・情動の喚起」への働きかけ

条件を限定し，工夫する必然性が生じるような状況設定  
機械化や少子化によって満たされた環境の中で生活を送り，家事経験も少ない子どもにとっ

て、家庭生活の中から課題を見出すことは難しい。

そこで、あえて不自由な状況や条件を設定することで、「どうにか工夫してよりよくしたい」「この状況をなんとかしたい」という状況を作り出し、子どもの思考を活性化していく。

#### 自分の生活とのジレンマが生じるような課題設定

家庭生活における問題の解決方法を考える場面を設定すると、判断の必然性が生じ思考の活性化が期待できる。そこで、子どもたちにとって身近で具体的な生活場面を取り上げ、選択しなければならない状況を作り上げる。また、自分のこれまでの生活経験と新しい情報との間でジレンマに陥るような課題を設定することも重要であると考えられる。

第6学年「まかせて！わたしは和食メニュー作りの達人（みそ汁編）」の単元において、みそ汁の工夫について考え、紹介し合う活動をする。すると、「健康」を第一に考えた提案が多く出される。そのような時、あえて「それは自分の家に合うか」とたずねる。すると、「長年のこだわりや味を捨てられない」「毎日ではできない」という考えが出る。「家庭の状況」と「自分たちの提案」との間にジレンマが生じるのである。こうしたジレンマを解消すべく、話し合う過程において、自分とは異なった考え方を知ったり、自分の考えがより明確になったりする。そして、「健康」だけでなく「家庭の状況」という新たな観点で自分の考えを修正していくことができるようになるのである。



このように、子どもたちの固定化した価値観を揺さぶるような教材を単元内に設定することで、考える意欲を誘発することができる。その結果、「物事を決定する場合には多面的に物事を考え、選択しながら自分の価値観に合うものを決定していく力」を育成できると考える。

#### (2)「精緻化」への働きかけ

##### 実験結果と結び付くような生活情報の提示

実験結果と結び付くような生活情報を提示することで、1つの生活事象に対して多面的に見直し、長所・短所の両方から比較しながら分析していこうとする思考が働く。実験は、日常生活では見たり感じたりしにくいことを実際に体感できるという効果がある反面、生活という状況は捨象されている。そこで、実験結果と日常生活情報を結び付けることで、学んだ観点が長期記憶として把持しやすくする。

第6学年「気持ちよく着よう」の学習では、具体的にどのような素材が適しているのかを考えるため、綿織物、綿メリヤス、毛、ポリエステル、ナイロンの吸水実験を行う。生活経験から、綿メリヤスの吸水性が高いと予想する子どもが多いが、中には毛がよく吸うと予想する者もいる。だが、実際に実験を行うと意外にもポリエステルの吸水がよく、乾くのが速いことも分かった。そして、その効果的な使用事例として、汗をよくかき、すぐに乾いた方がよいサッカーのユニフォームや登山用の下着には、ポリエステルが使用されているという情報を提示した。その結果、下着は「汗や汚れをとる」ことが主な役割だが、「体温を保つ」「快適に過ごす」という目的もあることに気付くことができた。



##### 実験結果をもとに慣習の意味を探らせる場の設定

衣・食・住など家庭生活を快適にするために、生活事象を多様な観点から見直し、自分にあった解決方法を考えていく際には、家庭での聞き取り調査や調べ学習を行う。しかし、こうした昔からの生活の知恵をただ収集・選択し、発表させる学習にとどめるのではなく、科学的な根拠による裏付けとなる実験を取り入れることが効果的である。得られた情報とそこに込められた意味や根拠を考え、探る場を設定するのである。そうすることで、昔からの生活の知恵や一般的に良しとされ何気なくしている行為には、意味や根拠があることに気付かせることができる。

第5学年「冬のファッションコーディネーターになろう」では、冬の快適なファッションについて多面的に捉え、コーディネートできるように「衣服内気候」を取り扱う。その際、「空気層」という新たな観点に気付くように「重ね着」の工夫について取り上げた。経験したことのない空気層の影響を共通理解させるために、空気の保温効果を実感できる2種類の実験（氷水での空気層あるなしの2種類の手袋体感実験、缶による温度測定実験）を行った。つまり、普段何気なくしている「重ね着」を、保温効果のある「空気層」と精緻化させて捉えさせようとしたのである。その結果、衣服の色、形、布地の他に、空気層を作る着方（重ね着の順序、外は少し大きめの服にする、一番外には空気を通さないものを着る）という観点からも、互いの衣服の保温の効果を見直すことができるようになった。



### (3)「簡略化・焦点化」への働きかけ

一つ一つの要素を吟味するために他の要素や条件を取り除く

考える観点多いと思考が広がり、判断が難しくなる。そこで、学習を展開する場や状況を限定したり、考える対象を絞ったりして考えさせることが効果的である。

第6学年「まかせて！私は食事作りの達人～お弁当アドバイザー～」の単元では、日常の1食分の食事を量、栄養、色どり、調理法、味などの「バランス」という視点からメニューを構成していく。その際、ごはんのみそ汁を中心とした1食分の食事を取り上げた場合、主食・汁物・主菜・副菜が一つ一つ別の器に盛り付けられ、ある程度調理法が限定される。そのため各々の料理の工夫には目が向くものの、全体としてのバランスについて考える意識はもちにくい。また、それぞれの器の形・高さが異なるため、視覚に映る表面積では量のバランスも把握しにくい。



そこで、ここではお弁当を取り上げ、「お弁当設計図」をつくる活動を行う。お弁当は1つのボックスに詰められているため面積や色の比較が簡単にでき、食事の量（全体の量、主食・主菜・副菜のバランス）や質（栄養と色どり、調理法）を捉えやすい。そして、それを「設計図」に表すことで自分の考えや工夫を見つめ直し、修正することが容易になるのである。

このように、条件を統一したり、省いたりすることで課題が拡散することを防ぎ、単元や本時内で扱いたい内容（上の例では、食事の量や質）に目を向けやすくなる。

同様の効果が、家庭科の中で唯一、課題選択学習として位置付けられている住居の学習においても期待できる。このことについては、実践編（66p注1）にて詳述する。

### (4)「繰り返し」への働きかけ

段階的単元配列や単元展開の工夫で、判断の場を繰り返す

よりよい意思決定をするために、生活事象を見つめる観点は段階性をもたせて繰り返すことが効果的である。例えば、布の選択において、第5学年1学期のランチョンマット製作では「食卓の雰囲気合う色」という観点のみに絞って選択させる。そして、3学期の袋作りでは「丈夫さ」「縫いやすさ」という観点が新しく加わる。第6学年のサマーワークウェアでは「通気性」「吸水性」「家族の好み」という観点を増やす。こうした単元配列により、少しずつ判断・意思決定を難しくすることで、多様な観点で比較しながら選択するという「思考力」を身に付けさせることができるのである。

また、単元内でも自分が意思決定したことがどうであったのかを振り返ることによって、思考様式が繰り返し活用され、定着しやすくなると考える。

第5学年「修学旅行に行くナップサックを作ろう」では、布選びの場を始めに設定し、「丈夫さ」「縫いやすさ」という2つの観点を重視して選択させる。この観点で実際に袋を製作させた後、振り返る場を設ける。その際、あらかじめ自分がその布を選択した理由をワークシートに記述させておくと、「丈夫で中身が守れると思って選んだけど、堅くて縫いにくい」「三つ折りにすると、針が折れそう」と、自分の選択の是非を始めの観点で見直すことができる。

